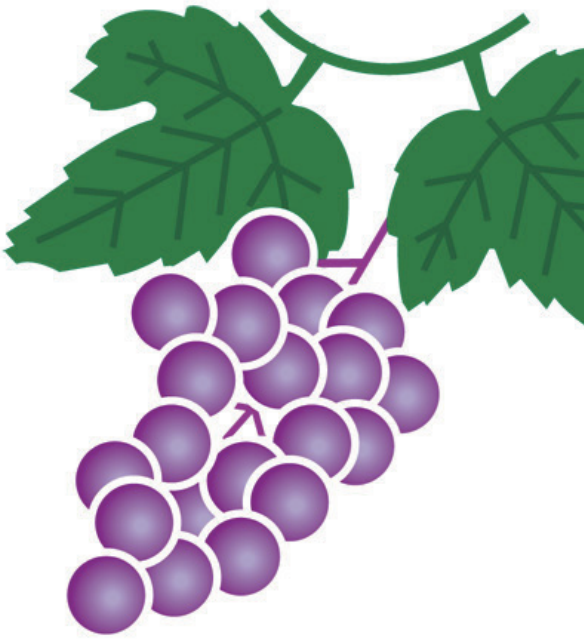
たぬ平とハクビシン



中村 玲子

じいさまのぶどう畑は、村のなかでもいちばん山おくにあるひろいひろーいところである。この畑からのながめは、じいさまのじまんだ。

ぶどうの巨峰がしゅうかくのじきになった。ことしはどこの家も、あまさもいろもよくのった。

じいさまのいちばんのかせぎどきは、あさの三時半から七時半のめしまだ。あさぎりぶどうは、朝つゆのつめたさがのこったまま荷づくりし、農協にだす。じいさまはこのときばかりは、じかんとのしんけんしょうぶになり、うでのみせどころだと、はりきってはたらく。

きらきらひかる星のもと、トラックのエンジンがかかった。もうすぐ出発だな。たぬ平はコンテナやダンボールばこが、いくつもつまれているトラックの荷台にもぐりこんだ。

たぬ平はじいさまの家のやねうらに、もうなんねんもすみついているたぬきだ。ぶどうをしゅうかくするときがきて、また山にいくのをたのしみにしている。

トラックがうごきだすと、たぬ平はコンテナからかおをだし、星あかりで、うすぼんやりとみえるけしきをたのしんだ。

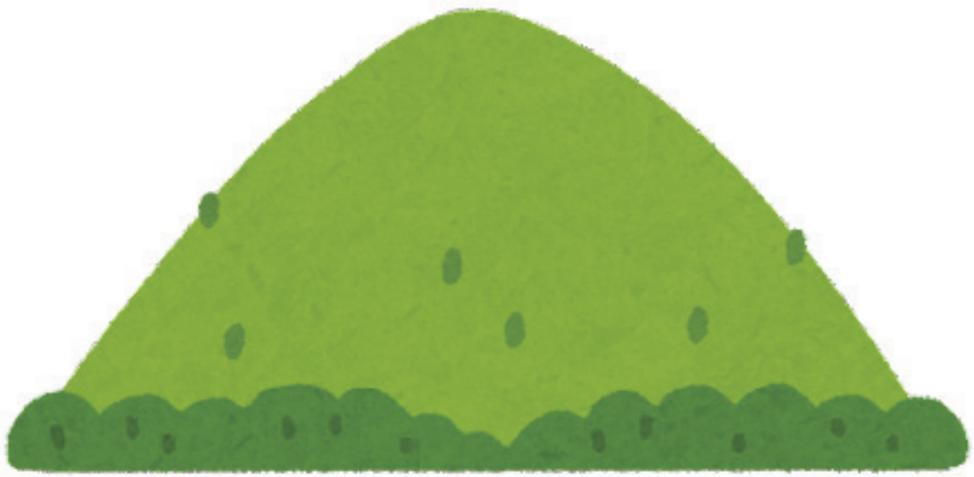
山みち坂みち　おいらたちの世界
山のともだちのにおいがする
いくえにもいくえにもかさなって
山のともだちのにおいがする

たぬ平はトラックがとまると、とびおりた。

じいさまがはちまきをした手ぬぐいのうえに、ヘッドライトをつけている。

たぬ平は、ヘッドライトの明かりがとどかない、ひろいひろーい畑のなかを、もっくらもっくらあるいてまわる。

あたまのうえにはぶどうの白いふくろが
いちめんにぶらさがっているぞ
ふくろからはみだしているぶどう



つまんで食べるとあまいあまい
もっとないかな　もっとないかな
もっといっぱい食べたいけどやめた
じいさまのぶどうだからな

夜があけ、畑のなかが明るくなり、まわりがみえてきた。じいさまの、けさのぶどうきりはおわった。手ぬぐいでひたいの汗をふき、トラックを運転して畑をあとにした。

たぬ平は荷台にはのらず、山の奥にきえていった。

じいさまはぶどうを食いあらす、まだよくわからない生きもんのはなしを村のもんからきいていた。あちこちの家であらされているという。じいさまの畑はだいじょうぶだったが、しゅうかくがはじまって、なんにちかたったとのきのこと…

たなのしたにぶらさがっているふくろのなかのぶどうの粒が食べつくされ、皮はぺっぺっと地面におとされ、くきだけをのこしてからっぽになっている。

五つも六つもふくろがからになっている枝を、なんぼんもみつけた。

じいさまは、あまりにもみごとにやられているので、なんとかてだてをとかんがえた。

ともだちの鉄砲打ちにそうだんした。

「よしそれならおりがよかろう。ちょうどイノシシのおりがあいている」

じいさまと鉄砲打ちは、さっそくトラックにおりをのせ、ぶどう畑にはこんだ。畑のすみにすえつけた。えさになる鳥にくをぶらさげた。

一日目、だめだった。

二日目、ばしょをかえたが、だめだった。

三日目、えさをかえた。

いろいろくふうして、おりにかかるのをまった。

山の奥にきえていったたぬ平は、しばらくぶりにじいさまのぶどう畑にもどってきた。

星のひかりのもと、畑にはいったたぬ平は、じいさまのヘッドライトの明かりがとどかないところで、がさがさうごくものにちかよった。

鼻すじが白いハクビシンだ。

「おい、ハクビシン、なにしてるんだ」
「きまってるさ。みてればわかるさ」
ハクビシンはぶどうだなにのぼって、ふくろをやぶって、なかの実をつぎからつぎへと食べてはすすんでいく。
ハクビシンのみごとなはやわざに、たぬ平はみとれていた。
「おい、もういいだろう。そんなに食べるなよ」
たぬ平はじいさまがかわいそうになった。
「ええ、まだ食べるのかい」
「うるさいなー　きょうはやめるよ」
たぬ平は、ほっとしていると、ぶどうとはちょっとちがったあまいにおいがしているのに気がついた。
「このあまいにおいはなんだろう」
鼻を地面にすりつけながらいいのいおいにちかづいた。
「おおっと！」
バシャーン！
たぬ平がなんだかわからないでいると、ハクビシンがとんできた。
「しまった。やられたか、たぬ平！」
「ハクビシン、たすけてくれ」
「たぬ平、おれにはどうすることもできない。じいさまたちがしかけたおりだから」

ハクビシンは、たぬ平におりのあることをおしえなかったことをくやんだ。

ハクビシンは、たぬ平にいいきかせた。

「いいか、たぬ平！　よくきけよ。おまえはいまからハクビシンだ。ハクビシンになるのだぞ。だれがどういったって声をだしてはいけない。しっぽはまるめてかくしておけ」

たぬ平はかくごをきめた。

「おれはハクビシンだ！」

じいさまはいつものように朝のしごとをおわらせ、しかけたおりをみにきた。じいさまはおどけた。

いっしょにいた村のもんは

「はあ、これは鼻すじが白いからハクビシンというやつじゃないか。どっか外国のほうからきて、日本にすみついたという」

村のもんは「ハクビシンをはじめてみた」といって、よくよくながめてかえっていった。

じいさまは鉄砲打ちにしらせた。

「ハクビシンか、よし！　夕方もらいにいくから、すずしいところにおいといてくれ」

じいさまは、おりを家にはこんできて庭においた。おりのなかにぶ

どうをいれたり水をいれたり、なんどものぞきにいった。

「かわいい目玉をしているな。たぬきににているがな」

日がくれて夕がたになった。鉄砲打ちがやってきた。

いきおいよくのぞきこんだ。

「おいおい、こりゃー、ハクビシンじゃないぞ。たぬきじゃわい。

たぬきはいらないから、むこうの山でにがしてやるわ」

たぬ平はいまも、じいさまのぶどう畑があまくなるのをたのしみに

している。

発行　二〇二二年一月一日
著者　中村 玲子
制作　さらしな堂